

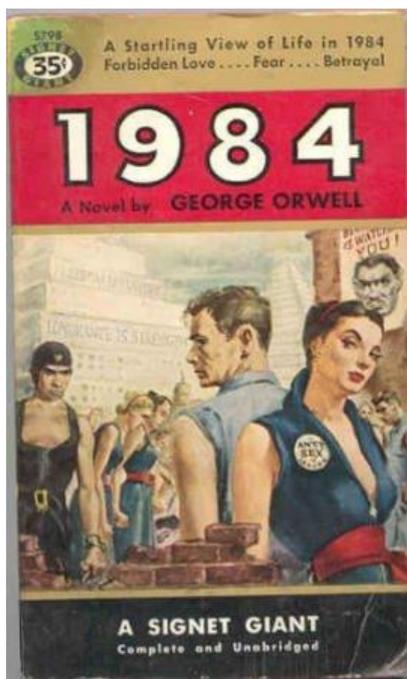
## アメリカにおける公的・公認の言説：

### 検閲とオーウェル流“二重思考”“言ってはいけないことの浸透”

James F. Tracy (Global Research)

August 6, 2014

かつて、前世紀のも最も厳しい全体主義体制を特徴づけていた欠陥が、いま西側の公的言説と行動の中に根を下ろしている。これは大きな問題や出来事の考え方を規制する、事実上の検閲として働く、ジョージ・オーウェルの「二重思考」に近いものである。こういう精神構造は、大多数の職業的ジャーナリスト、学者、公的立場にある人たち、つまり世論を代表しリードする人々の間で、それとなく共有されている。言うべきでないことを彼らが集団で一般に浸透させることによって、現行の信念体系や力関係が、保存され恒久化されることになる。間違いなく、このような口に来れない約束事に逆らう者には、こうした職業仲間からの追放を含めた、自明の制裁がある。



ひとたび、ある疑わしい出来事について、国家の認定する物語が、主流ニュース・メディアに公開され手渡されると、それはほとんど常に、疑問なしに“党内者”によって受け入れられる。このような沈黙は、権勢ある人物や体制に機械的に忠誠を誓うことによって、さらに

強化される。そのような世界観をもつことによって、人は条件反射的に、口にできぬことと、一定の社会政治体制の作られた自然性への広められた信仰を集団的に維持する、人格的信用を失ってしまう。そのような出来事の素人による代替解釈は、たちどころに“陰謀論”として退けられ、それがさらに“党内者”たちの結束を固めることになる。

言えないことの一般化によって、現実または形式上のお咎めという罰則のもとに、公的物語への忠誠が、西側において、ますます自由な探求と発言を腐食させていく。

自分の国家が非情な警察国家になりつつあるという考え方が、特に歴史上初めてという意識とともに、定着するようになった。例えば、マルキスト原理主義や党への絶対的忠誠に基づく過激な全体主義が、政治的異端者や非正統的言論を抑え込むために、収監と強制的精神治療を用いたのは周知の事実である。にもかかわらず、アメリカや他の国家において、例えば 1960 年代のいくつかの政治的暗殺、オクラホマ市 **Murrah** ビル爆破事件、9・11、あるいは最近のいくつかの大衆テロ事件をめぐる事実を、客観的に位置づけようとすることは政治的異端であり、国家による監視、訊問、強制的医療処置を正当化するもので、世評の毀損や失職の形で財産没収をすら伴うものだった。

このような不当な処置が、ニューハンプシャー州議員の **Stella Tremblay** に対して取られた。彼女はボストン・マラソン爆破事件 [1] の原因を質問した結果、公職を退くように強制された。また筆者が 2013 年初め、コネティカット州ニュートンの射撃事件の公的筋書きを質問したとき [2] も、同様のことが起こった。

その最も新しい例は、ニューヨーク州立学校教師の **Adam Heller** の場合である。彼が個人的に、他の誰かに、その場の用件で電話をしたときに、**Sandy Hook** 虐殺事件と、2 本の長い銃が法的に購入されたことに関する他の怪しげな出来事について問題を提起したのだが、それが奇妙にもばれて、ヘラーはこの後、地方法執行機関から、おそらく **FBI** の命令による 12 日間の入院で、精神治療を受けるよう強制された。その後、“法医学精神治療家”なるものの別の診断の結果、ヘラー氏は終身教職資格をはく奪されたのだった。この学校教師の経験は特別に危険な前例で、国家が精神治療の助けを借りて、強制的な制度遵守を課し、ソ連や同類の警察国家が用いたやり方で、“思想犯”に対する厳しい金銭的な刑罰を課したのだった。

「我が国の一人ひとは基本的な市民権をもっているのだから、ヘラーの市民権は根底から侵害されたこととなります」と、前教職員弁護士の **Michael Sussman** は言っている。**Sussman** の報告によると、ヘラーは地方警察の訪問を受けた後、病院に移り、「自分はある種の身体検査を受けるのかな」と思った。検査の後で、ヘラーが精神科病棟へ連れていかれ

たとき、「何の目的で？」と訊ねた。すると職員たちは「あなたは精神異常だ、病気です」と答えた。

Sussman は、ヘラーは精神異常でも病気でもないと主張している。

これはアメリカ内部のシベリアだ！ 彼らは彼を 12 日間、精神科病棟に拘束し、12 日たっても何も異常なところを彼に見つけることができない。彼は理路整然と話し、学識ある、30 代半ばの都会の青年である。彼には何も変わったところはない——ただ、ある人々には、彼の信念と探求と考え方のいくつかは、変わっていると見えるかもしれない。それは我々が、知的好奇心において人々がそうあって欲しいと望むたぐいの特徴である。[3]

同じような例として、2014 年 7 月 30 日に、イギリスのブロガー Christopher Spivey が、エセックスの住居で夜中の 2 時に警察の手入れを受け、“ハラスメントの疑い”で逮捕された。逮捕の数日前にスパイヴィーは、自分のサイトに、2013 年 5 月の英兵 Lee Rigney 殺害事件は、反イスラム感情を煽るための瞞着だと書いていた。警察は、どんな人々がハラスメントを受けたのかについて答えを拒否した。「スパイヴィー氏のオンライン・サポーターには、陰謀論で知られるようになった David Icke (アイク) 氏がいる」と、デイリー・メールは伝えている。[4]

このような国家の過激主義には明らかな歴史的な前例がある。例えば、ソ連における精神医療の政治的利用についての論文で、ロシアの作家で政治的異論を唱えた Alexandr Podrabinek は、精神病を指摘することが、国家に順応しない思想を公共の場から追い出し、自分自身の合法性は守ろうとする国家にとって、いかに見事に効果的な手段であったかを指摘している。「ウソを受け入れず、真理のために迫害される覚悟をしている人は少ないものだ」と、ポドラビネクは言っている。「しかし政府は、そういう人を、すべての泥棒、人殺し、レイプ魔や他の犯罪者を合わせたより怖れている。なぜなら彼らは真理の武装をしているからだ。シェークスピアが書いたように、“正義を論ずる者は三倍もの武装している”」[5]

ソビエト連邦についての真理は、対内的にも対外的にも抑圧しなければならず、そして「裁判は大きな音を立てすぎ、裁判なしの処刑はあまりにも大きなスキャンダルになるから、」理想的な“解決法”は、「政敵を精神異常と宣告することだ。実際、誰が統合失調患者の反逆を真面目に受け取るだろうか？」ほとんどの西側の精神治療医と違って、ソビエトの医者は一般的に、「彼らの非職業的、疑似スタンダードに従って、正常でないと考えられる者をそう断定した。彼らは“真理探究マニア”“マルクス主義マニア”といった異常者だった。」

[6]

“ソビエトの権威”に向けられた扇動や宣伝の罪のある反逆者たち、また「国家に対して特殊な、特別に危険な犯罪の意図」をもつ者たちは、日常的に、犯罪的精神異常者と診断された。“精神医学者委員会”を構成する国家臨床医たちは、そこで、起訴された者の違法とされた行為の責任を免除した、と歴史家の **Sidney Bloch** と **Peter Reddaway** は説明している。

「ほとんど例外なしに、法廷は委員会の勧奨を受け入れ、裁判は単なる形式になった。」被告の弁護団は当然ながら、委員会の判断に反対してクライアントの正常さを主張するが、反論のための証拠と見解を述べる機会はなかった。[7]

このような疑似科学のやり方で、現在の社会学者たちは、西側諸国の厳しい警察国家ポリシーと、違法な思想と表現を取り締まろうとする協約に、しっかり歩調を合わせている。複雑な出来事について非正規な物語をしようとしている、研究者や社会の共同体に“認識的に侵入”しようという **Cass Sunstein** のよく知られた提案に呼応して、似たような規定が“陰謀論”に近づく文献に侵入してきている [8] ——そのような見方を防ぐための“予防接種”あるいは“メタ予防接種”というような言葉まで用いて。[9]

「陰謀論によって与えられる心理的な快適さにもかかわらず」と、ある最近の研究は主張している、「その態度は典型的な適応の失敗である。陰謀は、他のもっと現実的に重要な政治的諸問題から大衆の注意をそらし、何であれ彼らが取り組んでいる問題への建設的なアプローチを妨げる。」そのうえ、この論文のレビューを引用すると、「陰謀論は破壊的な結果をもたらす——政府への信頼を倒壊させる、実業や企業の活動に対する極端な冷笑的態度を生み出す、危険な過激派運動に火をつける、など。」[10]

このような前文に明らかな政治的な仮想とそこに含まれる意味は、呆然とするほどである。最も重要なことは、公的な宣言や企業メディアの報告——その多くは外国や代替ニュース・メディアのオンライン版に現れる——に限定的な価値しかなく、国家にとって破壊的ですからあるかもしれないという著者たちの考えである。そのソ連の対物のように、そのような社会学者たちは、常に変わらず、“許容される”思想や言説として国家が認めるものの執行部に結びついた一部になる。

国家が精神病学に訴えることは、認定されない報告や分析が、インターネットを通じて、ますます大きな考慮を受けるようになるにつれて、絶望的な方法になる。そのような見方の競い合いということに焦点を当てた最近の学術論文を引いて、政治アナリストの **Kevin Barrett** はこう言っている、「陰謀論者のよくあるネガティブなタイプ——敵意をもち狂信的で、自分の偏狭な理論にしがみつくる者たち——は、9・11を疑うことなく、その公的説明

を弁護する人々に正確に重なっている。[11]

にもかかわらず、市民社会という土台が、国家の後押しを受けたエリート権力者にとってますます崩壊していきながらも、ウソの物語は、企業メディアの情報攪乱や科学的権威によって増幅された恐怖と沈滞の定着を通じて、相変わらず前面に坐り続けている。このような虚構が、一般大衆の意識と記憶に居座り続けるときには、その社会の全体は、自分の選んだ道でなく、歴史の放物線を一方的に下降していくだろう。既知の事実と証拠に理由を与える *counterpublics* の見通しは、“党内者”の最大の恐怖であり、それは今、警察国家の方法とニセ科学が必死に押しつぶそうとしているものである。

## Notes

[1] John Celock, “Stella Tremblay Resigns From New Hampshire Legislature,” *Huffington Post*, June 20, 2013.

[2] John Jaschik, “Reprimand for a Blog,” *Inside Higher Ed*, April 12, 2013.

[3] Michael Sussman interviewed by Jim Fetzer, *The Real Deal*, June 25, 2014; Jim Fetzer, “1984 Arrives 30 Years Late: Teacher Fired for Questioning Sandy Hook,” *Veterans Today*, June 26, 2014.

[4] Stephanie Linning, “Blogger Arrested in 2AM Raid on His Home After Claiming Lee Rigby’s Murder Was an Anti-Islam Hoax,” *Daily Mail*, July 31, 2014.

[5] Alexandr Podrabinek, *Punitive Medicine*, Ann Arbor MI: Karoma Publishers, 1980, 4.

[6] *Ibid.*, 5.

[7] Sidney Bloch and Peter Reddaway, *Russia’s Political Hospitals: The Abuse of Psychiatry in the Soviet Union*, London: Victor Gollancz, 1977, 103.

[8] See, for example, Special Issue: The Psychology of Conspiracy Theories, the British Psychological Society’s *Psychology Post-Graduate Affairs Group Quarterly*, September 2013.

[9] John A. Banas and Gregory Miller, “Inducing Resistance to Conspiracy Theory Propaganda: Testing Inoculation and Metainoculation Strategies,” *Human Communication Research* 39 (2013): 184-207.

[10] Ibid.

[11] Kevin Barrett, "New Study: Conspiracy Theorists Sane; Government Dupes Crazy, Hostile," PressTV, July 12, 2014.